

年号		
天保五 一八三四	渡辺正陰と青松葉事件関係 正陰、名古屋で誕生。通称信吉、鉦次郎（エツジロウ）舩彦（フナヒコ）。酔々と号す。尾張藩士。勤皇の志士。目付。高二五〇石、内五〇石足高（役職高）。養父は六一郎。母は岡本幸孟の妹の娘隆子。妻は柳生厳政（トシマサ）（尾張柳生六代）妹。後妻は中川庄兵衛の妹。祖母は、柳生厳春の妹。母の隆子は若くして夫を失い、一人子の正陰の教育に全勢力を注いだ。正陰は号が示すように、酒好きな風流人。和歌の贈答、書（知多郡の寺本郷学校では習字の教授）、画、茶の湯（茶道）、菊作りなどを楽しんだ。儒学、国学を学び、神道を信仰した。正陰は文武両道で、武は柳生新陰流の剣士。馬術、砲術、銃にも勝れていた。寺本郷学校には年々三〇人分の奨学金を寄贈。	嘉永二 一八四九
関連事項		六月四日 美濃高須藩松平義建（ヨシタツ）の二男慶勝（ヨシカツ）、一四代尾張藩主となる。慶勝は叔父の勤皇攘夷派の水戸藩主徳川斉昭（ナリアキ）から教えられることが多く、勤皇攘夷派志士の田宮如雲らを重用した。その中に勤皇派の渡辺正陰がいる。以後、慶勝擁立の中心となった勤皇攘夷派（金鉄党と呼ばれた）と、逆に幕府と結びつく佐幕派（ふいご党と呼ばれた）とが対立した。

年 号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関 連 事 項
嘉永二 一八四九		なお、松平義建の子は幕末に活躍した人物が多い。 二男慶勝、五男茂徳（モチナガ）（十五代尾張藩主） 六男松平容保（カタモリ）（会津藩主・京都守護職） 七男松平定敬（サダアキ）（桑名藩主・京都所司代）。 十一月四日 正蔭の養父渡辺六一郎隠居し、鉞次郎正蔭家督相続（一六歳）。 馬廻組を仰せ付けられる。
嘉永四 一八五一		三月四日 慶勝、江戸を発し、初めて名古屋入城。人事・財政改革。中西筑前守、佐枝将監免ず。 八月 千賀与八郎・上田帯刀らが知多郡鬼ヶ崎沖で船より大砲の試射。 十月 藩主徳川慶勝、熱田沖で海軍の大演習。
嘉永五 一八五二		閏二月三日 正蔭、大番組を仰せ付けられる。
嘉永六 一八五三		六月三日 ペリ、米艦四隻を率いて浦賀に来航。 六月二二日 将軍家慶没。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
嘉永六 一八五三		十月二三日 家定、征夷大將軍・内大臣に任ぜらる。
安政元 一八五四		三月三日 日米和親条約調印。 四月 名古屋御下屋敷脇広場で正蔭らが軍事演習を実施。
安政三 一八五六		七月二一日 米駐日領事ハリス、下田に来航。
安政五 一八五八		六月十九日 幕府、日米修好通商条約に調印。 六月二四日 慶勝、水戸斉昭、慶篤とともに不時登城。条約調印につき、伊井大老を面詰、慶喜の擁立を説く。 七月五日 慶勝、隠居、戸山邸に幽閉される。慶勝弟茂徳（モチナガ）尾張十五代相続。茂徳は開国佐幕派。 七月六日 將軍家定没。 九月七日 安政の大獄始まる。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
安政五 一八五八		十月二三日 家茂（イエモチ）征夷大將軍・内大臣に任ぜらる。
万延元 一八六〇		三月三日 桜田門外の変 八月十八日 天皇、条約廃棄または攘夷実行を条件に和宮降嫁勅許。 九月四日 慶勝、謹慎免。ただし、幽閉に同じ。
文久二 一八六二	閏八月 尾張藩士八〇余名、成瀬正肥（マサミツ）の参府に際し、奸人をしりぞけ、正義の士登用と勤皇を要請。 九月五日 成瀬正肥着府。 九月十日 幕名により竹腰正諤（マサアト）、退隱幽閉。 家老鈴木丹後守、用人武野新右衛門、勘定奉行成瀬嘉兵衛ら幽閉。旧用人田宮如雲、長谷川敬、尾崎八右衛門ら復活。	一月十五日 坂下門外の変 二月十一日 將軍家茂、皇妹和宮（カズノミヤ）と結婚。 四月二五日 慶勝、謹慎悉皆免ぜらる。 八月二十日 岩倉具視ら蟄居を命ぜらる。 八月二一日 生麦事件起きる。 十一月二一日 長州毛利定弘、慶勝を訪ねて、国事協議を約定。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
文久三 一八六三	一月 正蔭（三〇歳）慶勝に随従して上京。慶勝の御所参上に供奉。 三月晦日 正蔭、先手物頭（城中、市中の警衛）に任ぜられ鉄砲組同心を預かる。 八月十七日 正蔭、目付に任命される。 九月 正蔭、江戸詰めを命ぜられ、東海道を下る。	四月二八日 江戸城留守役茂徳、英国賠償金事件釈明のため上京を図る。 五月十八日伏見城から帰城。 八月十八日 公武合体派、宮中クーデターを実行。 薩摩藩・会津藩は長州藩勢力と三条実美（サネトミ）ら七卿を京都から追放。 九月十三日 十五代茂徳退隠。義宣（ヨシノリ）十六代を相続。
元治元 一八六四	七月二十四日 正蔭（三一歳）、手筒頭仰せ付けらる。 十月 正蔭、長州征討軍に従軍。 正蔭、中村修之進、中西真之助、勝野釜之丞（田宮如雲の次子）の四人、京都大堰川（保津川）に舟を浮かべて鮎取り。慶勝に鮎五〇匹を献上。 「つれづれの御心くみて若鮎を 都に居ます君にささげん」 十月十五日 正蔭、大坂で羽織一着を拝領し、城中での軍議の慶勝に御供。	七月十八日 禁門の変。長州藩、御所に乱入。薩摩・会津・桑名の藩兵と戦い、敗退。 八月七日 慶勝、幕府長州追討総督を命ぜらる。 十月四日 慶勝、征長全権授与せらる。 十一月 長州藩降伏。禁門の変の責任者だった三家老の切腹により謝罪を表明。 十一月十四日 成瀬正肥、国泰寺において長州三家老の首級実検。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
元治元 一八六四	十月十八日 知多からも、芸州広島行き人足出発。人足は高百石につき一人、家百軒につき三人の割合で出し、寺本村六八人、佐布里村二六人、古見村九人が務める。 十月晦日 徳川慶勝、毛利大膳父子征伐のため、大坂より芸州広島へ進発。 尾張藩銃隊長の正蔭は同心を召し連れ、慶勝に御供。 十一月 水戸藩の尊皇攘夷結社の天狗党（竹田耕雲斎ら）が尾張の近境に到来するとの情報を広島の本營で受け、正蔭は久野良蔵と共に名古屋へ急行。七日間で尾州に到着。幸いにしてことなきを得て再度広島へ。	十一月十八日 徳川慶勝、芸州家老浅野右近邸において三家老の首級実検。 十二月二七日 慶勝、征討諸軍の撤兵を命ず。
慶応元 一八六五	一月四日 芸州陣払いにつき、正蔭は大坂まで慶勝に御供。 一月 正蔭、大坂より伊勢路を通って尾張へ帰国。 三月二一日 元千代（二六代藩主徳川義宜）の疱瘡軽快につき、正蔭は前大納言（十四代藩主徳川慶勝）、および玄同（十五代藩主徳川茂徳）の名代として津島神社へ疱瘡平癒と長州征伐凱旋のお礼参詣。	

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
慶応元 一八六五	十月 名古屋城下での物価の高騰は外国貿易が原因であるとして、洋物（舶来品）の販売中止を求める一五〇人の連署の上申書が慶勝のもとに提出された。その後、田中不二麿ら七士が、洋物売捌きの紅葉屋富田重助（初代は古見村出身）店舗に乱入した。	
慶応二 一八六六	二月八日 紅葉屋が約束を破ったとして丹羽賢、田中不二麿ら七士が抜刀して店舗に乱入。 全ての商品を引き裂いて引き上げた（紅葉屋事件という）。 八月十六日 正蔭、御預組同心の砲術指揮に尽力したため銀二枚下さる。 十一月六日 病気により、手筒頭罷免され、寄合となる。	六月七日 第二次長州征討始まる。 七月二十日 将軍家茂、大阪城中で死去。 九月二日 幕府、長州と休戦を協定。 十二月五日 慶喜、征夷大將軍・内大臣に任ぜらる。 十二月二五日 孝明天皇、崩御。
慶応三 一八六七	二月二二日 正蔭、目付を仰せ付けられる。 三月十一日 正蔭、江戸詰めを申し渡され、名古屋を発足して木曾路を下る。	一月九日 明治天皇践祚。 八月 名古屋地方で、「ええじゃないか」の運動起きる。 東西に広まる。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
慶応三 一八六七	五月 正蔭、病気のため、江戸より名古屋へ帰る。 六月十日 願いにより目付を罷免され、寄合となる。 十月二三日 正蔭、願いによる御供の総轄となつて、慶勝に従い名古屋より上京。勤皇派有力尾張藩士の多くが慶勝に従い上洛。 十月二七日 慶勝、京都知恩院に着座。正蔭らは京都三条高瀬川下る東側の瑞泉寺に宿泊逗留。服部喜助、久野良蔵同宿。 十二月上旬 正蔭、伏見に斥候に行き、京・伏見間を奔走。伏見油かけ町の松屋伊助方に尾張藩士梶川橋輔と共に潜伏、探索。 十二月九日 このとき、尾張藩は正蔭が守衛総括となつて御所鳳閣之間、櫓下始め、仁和寺宮、有栖川宮、堂上家七家の警護を担当。 十二月十三日 正蔭、大坂城への使者を命ぜられ、大坂へ急行。途中の道路は伏見を追われた幕府、会津、桑名の兵の駄荷物で一杯であった。	十月十三日 倒幕の詔書下る。 十月十四日 將軍慶喜、京都二条城内で「大政奉還」上奏。 十月二三日 慶勝、名古屋城を發し、上京。二七日帰京。 十二月八日 尾張、越前、薩摩、土佐、安芸の諸藩一〇士、岩倉具視邸で密議。尾張藩から尾崎八郎右衛門、丹羽賢加わる。 十二月九日 王政復古の大号令下る。 宮中の要所を固めていた京都守護職の会津、京都所司代職の桑名の藩兵が追われ、武装した尾張、越前、薩摩、安芸、土佐の藩兵がこれに代わり、御所及び諸公卿の邸宅を守衛。 同日夜、明治天皇（一五歳）をお迎えして、御所において、総裁、議定、参与の三職による小御所會議が開かれる。総裁の有栖川宮親王、議定の尾張徳川慶勝ら一〇名が、参与として岩倉具視、西郷隆盛、木戸孝允らをはじめ、尾張からは田宮如雲、丹羽賢、田中不二麿の三名が列席し、新政府が発足した。 十二月十日 新政府議定の尾張徳川慶勝、越前松平慶永は、二条城へ行き、内大臣に就任している徳川慶喜に辞官、納地を促す。

年 号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関 連 事 項
慶応三 一八六七		十二月十三日 徳川慶喜、二条城を出て大坂城に移る。 会津の松平容保、桑名の松平定敬がこれに従う（共に前尾張藩主慶勝の弟）。
慶応四 明治元 一八六八	一月二日 斥候中の正蔭（三五歳）は、会津・桑名軍勢が伏見奉行所に参着したことを知り、直ぐに早馬にて深夜、京都知恩院の慶勝本陣に報知。終夜軍議。 一月三日 正蔭は早馬にて伏見へ斥候。会津・桑名に対峙して、薩摩・長州・土佐勢も兵を繰り出す。夕方、鳥羽にて発砲、戦争開始。正蔭の目の伏見でも戦争開始。伏見奉行所の新選組歩兵に向けて、薩摩が大砲を発砲。砲弾が伏見奉行所の火薬庫に命中して大爆発、炎上。死骸の山を築いた。 正蔭、この事を直ちに、早馬にて本陣に進。この日より、毎日毎夜合戦止む時無く、六日まで続く。薩長の勢い激烈。 一月六日 鳥羽・伏見の戦いで、旧幕府軍が敗退した。そこで、正蔭、津金彦八ら、二条城を収公。以後、二条城を守衛。	一月三日 鳥羽・伏見の戦いはじまる。 一月七日 新政府、徳川慶喜追討令を發布。 一月八日 慶喜、大坂城を退去して、江戸へ向かう。 一月十三日 名古屋生まれの開成所教授 柳河春三、老中稲葉正邦に 対して紀伊、水戸家を援軍として幕府の総抗戦を具申。 一月十五日 慶勝、尾張藩領内の姦徒誅戮と諸藩勤皇誘引のために、帰国を新政府より命ぜられ、即日離京。 一月二十一日 藩主徳川義宜、名古屋を発ち、二五日着京。 一月二十四日 慶勝、成瀬正肥に国政を委ね、丹羽賢、鷲津毅堂ら四〇余名には、勤皇誘引に当らせ、三河、遠江、駿河、美濃等の諸国に派遣して、勤皇の誓約書を提出させた。

年号	慶応四 明治元 一八六八
渡辺正蔭と青松葉事件関係	一月六・七日頃 密使吉田知行、間宮外記の命を受け、在京中の慶勝のもとへ急行。 一月十二日 尾張藩成瀬正肥、田宮如雲、小瀬新太郎、尾崎八右衛門、荒川甚作、丹羽賢、田中不二麿ら七重臣、岩倉具視に国情を訴え「嘆願」す。 一月十五日 知恩院において、朝廷（岩倉具視か）より正蔭に申し渡しがあり、渡辺新左衛門らの朝命による斬首の件、正蔭に委任される。 一月十六日 成瀬正肥、離京。 一月十九日 慶勝、日程変更して清洲に仮伯。成瀬正肥と密議。 一月二十日 青松葉事件起こる。 午前一〇時、慶勝、帰城。午後二時二之丸東、西鉄門を閉鎖。家臣の出入禁止。家臣団を城内に留置。 午後四時ころ、佐幕派の重臣、渡辺新左衛門、榊原勘解由、石川内蔵允の三人を二之丸向屋敷において、「依
関連事項	

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
慶応四 明治元 一八六八	朝命賜死」の名のもとに斬首。 この時、正蔭、太刀取等総轄を命ぜられる。榊原勘解由の斬首役を務める。午後六時開扉。 一月二一日 評定所において寺尾竹四郎（正蔭が斬首）ら四名が、「依朝命賜死」の名のもとに斬首された。 さらに、二三日に二名、二五日に五名、合計十四名が斬首された。 二月八日 正蔭、目付を仰せ付けられる。 二月十八日 正蔭は、佐治為泰とともに新政府軍会津攻め尾張先鋒対の軍監に任命され、東海道を下る。 四月十一日 渡辺正蔭（帰順正気隊）は尾張藩兵と共に江戸城の収公に従事。 四月二七日 渡辺正蔭（帰順正気隊）が、米沢藩江戸上杉屋敷に滞陣のとき、大総督有栖川宮より北越の官軍の援軍を突然申し付けられ、二九日越後出兵。	二月七日 義宜、御親征東海道先鋒を命ぜれる 三月十四日 官軍大総督府参謀西郷隆盛と旧幕府陸軍総裁勝海舟との間に、江戸城開城の交渉成立。 同日、「五箇条のご誓文」発布 四月十一日 江戸城無血開城。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
慶応四 明治元 一八六八	五月十日 小千谷、長岡の間にある古志郡榎峠で、奥羽越同盟軍（東軍）と新政府軍（西軍・官軍）とが銃撃戦。榎峠を守護する尾張藩の渡辺正蔭（帰順正気隊）、久野長一（正気隊）および信州上田両藩兵は、同盟軍に敗退。 五月十一日 正蔭らの官軍は弾薬が無くなり、榎峠を放棄。榎峠を退陣後、正蔭は信州上田で弾薬を調達して馬荷で越後へ送る。続いて上州高崎で総督へ戦況を報告後、正蔭は病気のため尾張へ帰る。名古屋で静養。 六月 正蔭、尾張藩先鋒隊副将を任命され、軍事奉行並役となる。 七月 正蔭は病氣全快につき、尾張より奥州表へ進発。 七月十五日 正気隊は小千谷、榎峠、朝日山などの戦いで死傷者、病人が多く、兵力が弱まっているので、尾張藩先鋒総括の千賀信立の判断により、尾張集義隊と兵備を交替して、正気隊は帰国。 七月二十三日 正蔭（帰順正気隊）、江戸より奥州会津へ向けて出兵。	五月二日 中立を掲げる長岡藩家老河合継之助と土佐の軍監岩村精一郎との会談が決裂。 五月六日 奥羽列藩同盟に長岡藩ら北越六藩が加入して、奥羽越列藩同盟成立。 七月十七日 江戸を東京と改称。 七月二十日 江戸で、尾張藩に奥州出征の命令が出る。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
慶応四 明治元 一八六八	八月七日 帰順正気隊（正蔭）、土佐藩兵と共に館ヶ岡・今泉で会津兵と戦闘、勝利。 九月二二日 正蔭率いる帰順正気隊も会津若松城を収公。 十月 東京麹町の尾張藩邸に帰参。陣中の正蔭に、新政府より御酒、御肴、と拝領物を下賜される。 十二月九日 正蔭、名古屋に帰着。藩主徳川義宜に拝謁。慶勝、茂徳の御手酌にて御酒下され、料理も振る舞われた。	八月二二日 長沼陣屋の会津兵を撃退。若松城へ出撃。 八月二三日 尾張藩兵らの官軍は会津若松城を包囲。城主は籠城を決意。 九月八日 明治と改元。 九月二二日 会津若松城主松平容保、降伏・開城。尾張・薩摩等四藩が城の収公に携わった。
明治二 一八六九	一月十五日 正蔭（三六歳）、軍事副知事を命ぜらる。 七月 正蔭、参政となり、軍務判事の御用向を司るよう命ぜらる。 十月八日 名古屋藩大参事に田宮如雲ら二名、藩権大参事として渡辺正蔭、丹羽賢、中村修之進ら六名がそれぞれ任命される。 十一月十四日 正蔭、軍務御用向を司るよう命ぜらる。	一月二十日 薩・長・土・肥、版籍奉還を上奏。 六月 尾張藩を名古屋藩と改称。藩知事徳川義宜。

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
明治二 一八六九	十二月十四日 正蔭、軍務判事と刑法判事の兼任を任命される。 十二月 正蔭、民政判事を命ぜらる。	
明治三 一八七〇	三月 正蔭、願いにより罷免され、金一〇〇両と御手道具（甲冑）、祐定の刀を下さる。 非役の内は年に金三〇〇両年々下さることとなる。 十二月五日 名古屋藩庁、十四士に対して家名相続を許し、禁固中のものを赦免さる。	
明治四 一八七一	九月 正蔭（三八歳）、明治維新の勲功として永世賞典禄二三〇石を下されることとなる。 十月 給禄を返上した士族渡辺鉞次郎正蔭、春日井郡光音寺村か知多郡地の内への帰田願いを提出。 十一月 浅井樺園、浅井篤太郎父子、知多郡中島村小根に移住し、医院を開く。篤太郎は正蔭の長女春児の婿。	七月十四日 廃藩置県。 九月 藩士の帰田法施行。

年号		
明治四 一八七一	十二月 このころ、正蔭も中島村五番屋敷（荒古）に帰田、移住する。	渡辺正蔭と青松葉事件関係
明治五 一八七二	八月 平井村常光院に寺本郷学校が設立され、文学、習字、算数の教授が各二名ずつ任命される。正蔭は習字の教授に、旧藩校明倫堂漢字二等助教の浅井篤太郎は文学の教授に任命された。 正蔭、永世賞典禄の中より、年々三〇人分の奨学金を寺本郷学校に寄贈。 十一月三日 正蔭、額田県第一大区（知多郡）長に任命される。	
明治六 一八七三	三月 正蔭（四〇歳）、愛知県第七大区（知多郡）長に任命される。 四月 正蔭、願いにより区長を罷免される。	
		関連事項

年号	渡辺正蔭と青松葉事件関係	関連事項
明治七 一八七四	七月二十九日 夜、正蔭（四一歳）の家に山田鉄之丞が突然入来。不意に抜刀して、無刀の正蔭に斬りつけたため、妻と娘は必死になって山田の刀を奪い取ろうとして、妻は少々負傷した。 八月十四日 正蔭、友人と酒宴後に信濃川（藪川）にて水泳中、痙攣を起こして溺死。墓は知多市八幡の野崎墓地にある。	